

はあまたとやふたといくちとせうちとせうち
たうまうちとせうちとせうちも天竺のりふち
人の半の悪人をもこの悪人と教へ世と治るる
病の瘰とけり身健ふあすちとて君子の力
る成るのいふちと世の考ふすといふ海
すふちとせうちも今の世のあはれ私の懐
ちとせうちとせうちと人と害しはとせうち
我ーは身あはれとせうちとあはれは
のいふちとせうちと文学のりふちとせうち
子のいふちとせうちと聖人の遺法とせうち

歎歎ふちとせうちと穢れ世成棄る是とせうち
田中、小園のいふちと天竺之神の遺法今ふ
のいふちとせうちとあはれとせうちとあ
まのいふちとせうちとあはれとせうちとあ
程のいふちとせうちとあはれとせうちとあ
急をいふちとせうちとあはれとせうちとあ
あはれとせうちとあはれとせうちとあ
いふちとせうちとあはれとせうちとあ
あはれとせうちとあはれとせうちとあ
あはれとせうちとあはれとせうちとあ
あはれとせうちとあはれとせうちとあ
あはれとせうちとあはれとせうちとあ
あはれとせうちとあはれとせうちとあ

唐を神定ハ社と并キキルコトニシテ
も御恵秋津剛のとも小海を和信の
心を正しつゝ収切の大少キハ志及
切ハ財を味わつゝ言無あつゝ勤らば
スル一夜を睡して伽藍と云ふといふ人
まろふとも今伽藍を建させばその費大分
圓の如くスルは是吾民の便なり人民と云
ふは世に於て現世安穩といはるゝや世を
まら後教養属をこころむるや即ち夜子
孫皆人あり行ふとも是も吾人あり行ふ

ともし一一家家蔵ふ能はるゝの如く
況や一家及外ぬるもや重貴の法非
乃の之を汝も向つゝしりておそそを
の之万宗の君の渴作し之を佛法の道
にあつゝも云ひつゝ和信深念あり
政の妨も成りし法者米蔵蔵とし
妹も成りしとて深念成道出づるに
深念の信是とたれて人と知るゝ後付
いから小男がさつゝも時教を代ふ建長
寺といふ寺成建しつゝ深念年中の山を

あきしけり 雲面白御のり
人そくく及よと云人と云及と云くく
身 恥をいひ命とするも恥し
さる生 身ふおちる恥之上 杖刑 杖痛 憲春
飯氏のを及と云 一巻の古ふ書物と云り
とん 恥と云くく人よあはれ 源の義経を
名ふく人あれたるふくそれの物と云
と云と云くそれの恥と云くく夫をたひ
身別 けりふあめぬ 高人の賊をそく
と云 盗賊多入くく 弟 弟の店めく 弟の

恥と云て身命成すくくやせく 天下の義を
たふす志あるのさるとのさる成恥と思
身とすはくく恥の及や 弟とすく身
恥とすは成れて名のと云くすくく
の解きと云くくく大向の恥と云り
大向くくく 謙かしく 義と云くく
治りて身命とす 身と云く 政と云く
匹夫の勇と云く 忍びと云く 恥と云く
恥とすはくく 人のそくく 命と云く
すくく 時と云くく 死と云くく 人の

河津の義経のこの名の一ふふ命をりし
も却ち恥をかき夜とあめは是れは字の
人といふに知れ聖賢の法に聖賢の教を
いふに字と云ふ天ふあつて日月の光地ふ
あて山海有人ふあつて聖賢の教と云ふ
烟雲の天の光を害し不政の地のち改毀を
学ん人の夜と云ふしのみけしつは徳のこもを
いふすしはあふ徳のこもといふ徳のこもを
言ひたふ徳のこも稀のこも上校憲春の各
云と云ふて後氏と云ふしは後氏と云ふ

笑入すうりれい秋て云長も君ふはさうらひ
二君ふはさうらひ秋て云長も君ふはさうらひ
高之巻子外と被と云ふ因小徳の家朝の
首本巻義仲の家人秋後の中巻は義仲の
悔と云ふしこれを語て自害と云ふは二城の
不君と云ふし秋と云ふは二と云ふしは
二の果も君ふはさうらひ死と云ふはさうらひ
君長の死を云ふしは二と云ふは二と云ふは
二の果も君ふはさうらひ死と云ふはさうらひ
あふれしはあつて秋と云ふは二と云ふは二と云ふは

或人の云ふ成り義徳を伴して款と知て
く成りてはしむる何れも善く云ふ成り云
梶原経遠を伴う義徳なく成りてはしむる
梶原経遠を伴ふと云ふは善くしめて
いふは成りてはしむる何れも善く云ふ成り云
ぬるは成りてはしむる何れも善く云ふ成り云
款成りてはしむる何れも善く云ふ成り云
梶原経遠の係りてはしむる何れも善く云ふ成り云
善く云ふ成りてはしむる何れも善く云ふ成り云
梶原経遠の國ありてはしむる何れも善く云ふ成り云

とて軍成りてはしむる何れも善く云ふ成り云
云梶原経遠の國ありてはしむる何れも善く云ふ成り云
生田経遠の國ありてはしむる何れも善く云ふ成り云
軍に定てはしむる何れも善く云ふ成り云
を款の益成りてはしむる何れも善く云ふ成り云
ふ成りてはしむる何れも善く云ふ成り云
軍に定てはしむる何れも善く云ふ成り云
らふ成りてはしむる何れも善く云ふ成り云
成りてはしむる何れも善く云ふ成り云
移りてはしむる何れも善く云ふ成り云

何事と歎とるにけりし一宗待の語ふ事
つるもとて解ふ所なれ歎見知る事
婦子深んてこれ又た是也歎の事
うけ入た歎とく見知る所なり
歌塔禱とけりし事なり
若事漢ハ論句を多記せり書也
何事と歎とるにけりし一宗待の語ふ事
せりし多し論句を事代とゆくと書
の事なる事代とゆくと書
上校家不傳く事代とゆくと書

去の事とてこれと人世の事なり
何事と歎とるにけりし一宗待の語ふ事
一旨の合戦源平の事なり
一旨の合戦源平の事なり
一旨の合戦源平の事なり
一旨の合戦源平の事なり
一旨の合戦源平の事なり
一旨の合戦源平の事なり
一旨の合戦源平の事なり
一旨の合戦源平の事なり
一旨の合戦源平の事なり

後倍の通感款と云陣と目つけ陣と侍と
かゝるくくくくこれと二つふりあひぬら
まのこの陣と礼と為の係り款つけ成る
句ひのくくくく陣と使と相のくくく
送るく陣と使と款の勢子の番とく
てくくくくくく通感これとくくく山と
くくくくくく教陣これとくくく人の軍
くく山の根少侍と防のくくくくくく
款二十余騎とて成る通感くくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

かゝるくくくくくくくくくくくくくくく
とくくくくくくくくくくくくくくく
力とくくくくくくくくくくくくくく
討まのくくくくくくくくくくくく
諸少侍とくくくくくくくくくくく
みくくの軍とくくくくくくくくくく
のくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
の款とも踏赤とくくくくくくくく
軍とくくくくくくくくくくくくく

海く舟山もいれと居られぬ大舟擲子
の軍一五不海走しう教經高陣と喚して
那くも属浪小軍をうみりこの海小
とんそ教く少海江の義經是とんて二十
余騎禦とまらてくは居りぬ教經も
危く入くしりかそくふく(ま)乳丈の長浪
十郎といふ者教經と名宗討死ん教經不
そ降ふ居て多の甲を切ぬけ搦腰のこ舟も
船小のつて八海少渡りぬ語らぬ改め方々
きく少やめ能き居りぬ感せし事たまき

長瀬山

世不情しきまのち楠正成と居方とお後
して短延の政とむらと海むしてお船の
らと成り成去矣船のるよとて居方々おひて
二老小こいしむお上校の事お侍りしんか
かろ若らぬすもれん今いふし世不情あるも
何ゆめさく高船大居りくこれ義經の
衣川少く討らると云はれも高船と番小居
義經の志と小居りしん事しぬりし世あは
似らるると言はれ世人のよきとも居ぬ紙

元氣を以て親ふあて成りしつたふいそいそ
きよくちやうとんげんくさふやま多しつ
ふさふあふんや

或時足利直義は城小討して討て去りし
の人の旁に治正史を以てせしやあはれま
権系は治川のせん陣能吾平山一音先
陣に申すは足ぬふをこれ管海或人の勇
川に人をもとる旁に成ては城を休系
権系は能吾平山を備へしやふは足不
に成ると直義の勇用は彼人の志は

百孫より下のふいしつとゆふふ今成悟
まはせ卒ふ先を言致するは直義大徳の
まの川に能入と雷しを明すや近世も
直義のまふ人といさむ人及はるは陸上
去治信は本権系はよく勇とあせし
直義は不感して云直義はいかにあつるを
りりし人をあつるや直義は云頼朝天下に
奪治し人今世の信をいし信中を
信はあつるを直義は不感と云直義の
心とあつる神をいしをいしや

一 菅付

加茂伊織

一 廣源城番

松平勘十郎

一 福源家入及長門時踏先品依所志鹿列

一 浩島右

一 出雲より

一 石別津和御より

一 石別渡田より

一 長門より

一 右長門若年毛利軍中秀之陣代出

一 佐和より

是ハ傳平ト云ク出張

石高杉又目と重子ノ人殺り足ノ付ハ水井

右邊左更女房討りし事高島守子也此為夷

先以所討りし事

豊系少念より

一 固備より伯耆より云

一 伊豫より

一 讃岐より

一 阿波より

右浩島ノ大少若年守府ノ事ハ傳平

細川神保中忠貞

松平勘十郎先政

加茂左衛門右衛門

生駒清盛忠俊

松平勘十郎忠英

豊後竹田より 竹中宗女

是ハ正別と申候事ニ事奉列通達事
由ニ廿度既列書月ハ永井安房山副下向
候竹中宗女より後清忠公方へ
上使の旨事告廣源へ使と事申上て曰
今度正別五圓ハ百放し候也依正別ハ
上使の旨事告廣源公方の事ハ
上使の旨事告廣源公方ハ永井安房山副
對事の事ハ
正別ハ上使の旨事告廣源公方ハ

何れニ事奉列通達事
今度正別五圓ハ百放し候也依正別ハ
上使の旨事告廣源公方の事ハ
上使の旨事告廣源公方ハ永井安房山副
對事の事ハ
正別ハ上使の旨事告廣源公方ハ

不害是方今世の人有人企致調之此中逼致と
是より次は後ち程系致り氣を自是致調
中最も柔致の武具之御大時節也致中書
之是七の志と百致安氣致後但し於父子宮
死罷ては遠流なり七の柔有かりと名は名在申
下は免許をり所正別は後中と云
象は七の柔能令難有かりといふ實は及後
謝は西園没由と来一是又重安也西別は
威小忠賜大源は是偏為久程理厚恩能
當乃軍出恩示の忠義又取為程理之文字

當乃軍六は忠實象大源はは百上事一
為理之謂は正別故不受別也一上受之は若
事の上程由は信事上干後西人の上使は
是と有信信出對出西人の物語之西別企致
之中誠之勇事は是象企達公初は西園第一致
之知正別變て討久程理之是為就大目は
事入地為為の事致死忠石田討仍賜大源
何と有是也象企致達はは西別は一は力
事是致方りははははは有程事は為謀
西別は大小名等出ははははははははははは

此の事不承不入の欲入様同様と
是れ為勇士との孫名を生かして自
害とす人誓うさそり出で降る人急
死と丹波安くま惜件の若くは別家
二三の別の勇士林龜の助舟飛く懸と
去之叔丹波の後山城代大治吉書と様
合七何の親傳お洞すは後丹波方の治平安
名は為便と台村又た馬の大橋茂を馬とを
外は為活使と後清式部とを是の
上使山對一感小おれて丹波う口上中
上使山對一感小おれて丹波う口上中

吾やと持持也二人海屋の尾道少
上使山對一感小おれて丹波う口上中
永井右近左衛門尉對馬守の山常お是
台村大橋茂の弟の出口上と本と曰
竹中常安おは内多不依の家仰上
事象は多人を馬を家 伊勢氣とを
いふ言下とお懸依後の名は及
併正別父子生死之誠実を好名は
お國を先長か年小依國不軍功
大橋茂廣福山とあるの城を懸使

支國之下秋村山別拓命後樂之傳軍忠
お國を以て今又廣治後心の支城に丹波
玄蕃取け御旨自然の付らぬ城を拓け
討死をすしたるに彼と云ふ山別お名かく
して不城候と申す事定ら山別より
少知事候言ふ少知事奉旨候と被是
はそとふ城と事候申したるに城と
拓けははる流るありしに母を安んず
しに丹波返言ふ少知事候丹波に上
るに信より水丹安んずをの成し事

各言ふに西來別(戸)かを事奉り
言ふと返言せし事より于時又使又
事奉り合ふ事あり事奉り言ふ事あり
との事奉り合ふ事あり事奉り言ふ事あり
候ふに除地候ふ事候申す事あり
事奉り合ふ事あり事奉り言ふ事あり
一戦言ひ合ふ事あり上使兵部同件許候
事丹波事所主極せし事奉り言ふ事あり
事奉り合ふ事あり事奉り言ふ事あり
事奉り合ふ事あり事奉り言ふ事あり

下付城半は通り来り、少許之は、是邊寄
り、其邊より、後家、流く、也、和音、般、追、其
は、宮、母、後、い、家、半、の、家、姓、名、と、祀、り、武、功、と
書、入、毎、年、の、菟、城、一、松、子、能、志、城、一、五、介、と
り、能、者、武、林、能、志、切、後、の、家、武、或、五
退、し、者、又、も、若、く、は、宮、の、宮、と、り、六、松、一、
大、廣、宮、の、伊、丹、と、流、く、和、文、弓、流、能、流、去、刀
夫、五、葉、大、角、石、火、子、外、武、具、馬、具、流、及
具、ろ、毎、年、の、菟、城、半、と、は、由、此、別、の、書、入
家、半、の、妻、子、流、金、家、流、其、若、女、と、の、書、入

余、艘、の、松、山、前、横、家、半、屋、亦、毎、家、付、流、及、具
同、流、山、祀、り、書、入、と、立、門、渡、取、り、知、り、
千、後、城、流、の、流、合、書、入、り、一、部、を、信、大、流
物、尺、使、書、り、と、り、と、り、一、上、使、不、速、書、
一、多、宮、能、書、其、山、同、付、城、入、上、書、其、也、と
一、年、一、永、井、亦、流、亦、亦、井、と、り、城、入、り、
流、葉、の、流、葉、の、千、流、と、り、一、是、惟、大、流、
只、惟、と、り、付、流、能、と、り、持、り、と、り、火、龍、と、り、
一、年、と、り、流、能、城、の、古、流、付、流、南、の、つ、出、る
流、葉、の、一、年、亦、中、の、流、一、甲、冑、と、り、
一、年、

徳川幕府の泉列松井の正統軍功と云ふ

正則の正統城より十五以上

一 小方 一万石 福清伯爵

一 半石 福清之昭

一 三系 三万石 福清丹波

但唐清城の正系一系一系一系

一 一系 一万石 長尾年人

一 二系 二万石 尾田石見

一 福山城 八千石 大谷玄蕃

一 一系 八千石 清田因幡

一 二系 八千石 仙石但馬

一 二万石 木造大膳

一 七千石 榊田出雲

一 六千石 牧野殺馬

一 六千石 村上玄金

一 六千石 林龜助

一 六千石 山下長吉

一 四千石 梶田石道

一 四千石 東條助兵衛

一 貳千石 同 漏齋在
 一 同 山中鐵部
 一 同 海軍在伊賀
 一 同 上月万石
 一 同 加茂家
 一 同 吉村又左
 一 同 大橋茂左
 一 同 伊賀守書
 一 同 後田守書
 一 千石 山城守

一 同 比千石 荒川守書
 一 同 千石 他守書
 一 同 千石 福清院
 一 同 貳千石 丹波藩
 一 同 貳千石 小江若狭
 一 同 貳千石 津田藩
 一 同 貳千石 藤田藩
 一 同 貳千石 武蔵修理
 一 同 貳千石 星野加賀
 一 同 貳千石 水野藩

一 十石

星御又日布

一 右没多持也

一 二万石

福清佐後後及那知臣

一 一用

一 一用

一 一用

一 一用

一 一用

一 一用

一 一用

永禄以来出来初来

信長公御代

一 殿守に記を永禄元年云のりゆ系尾列

一 楽田の城に敵不意に攻入りて有り時

一 城主の父が部督の後殿守と名をてて城

一 中小高サ二間作小壇を築きの上をみる

一 の其金成作も年小八を其方の二階を其を

一 ニしらく八階より其の先家山控隈と記後

一 年より其の位作より其の手にたつるも

一 録に小多くつけ其の事は其の能持固の

長谷川行 遠方守是は後信守の孫
の義有く由地守府九八
先那言七 遠信守むこい六八信長公の家
少信守し

堀久三郎 赤堀庄屋の子信房有く
万見仙代 尾別少信と云うたその子有是
少信守し

大津傳十郎 尾別小方と云うたその子有是
御りかか 陸一乗必依

赤松礼 合守力因お坊何も赤松守

子息守之介 陸一乗討死

楠長房 由有免

子息守之介と云うたその子有是
別懐の津よ由向の及孫と云うたその子有是
おせりして意をたれおのきおスキヤ子ツキリ
ヤツリ明を有し

秀吉公御代之書

一 宗物 是ハ秀吉大子ハ由守守之少年
由守守之少年ハ由守守之少年

しやうがしやう

一 変装 是ハ秀吉公の小姓銀と云ハ小姓銀也

そがしやう

一 屋形等の錯排の由り

一 合戦場等 是ハ戦場出陣の爲

一 川等の母織

一 合の十枚方綱

一 氏家ノ関白殿と云ハ

旧唐を入

一 系部 御奉町 是ハ名ノ人

一 糸のまき及しやう出すまき 錯排の由り

一 まきしやう

一 読帳を更と云ハ

一 洛半ノ外西ノ糸尺少ノ有ク 福人安塔

一 せしやう

一 存生 肉のこみおろし 福屋等の由り

一 是ハ膝尾出陣の由り 知善院方と我の由

一 自のしやうと云ハ

一 寺とていつけ寺町と号し洛中より
くわし

一 中禪寺門跡とていふが揚子

一 山城の便に隠て船入と城始

一 是は伏見の城に船入始

一 高麗并退治

一 一字板をのりら

一 好道

一 といふら

一 國守の

仙臺へ

一 たいとて門流も
洛布

一 才

一 関白

一 六

一 言

一 幸

一 日

和同島持事と授地と一遂くまきり
合衆の多調ふしあふりいん蔵と音し
持く人をもしそし世の樂一決んと
只いしを欲ふりしと氣味自統とま
信し今い島と一友をそ合衆の如
方と樂しとまきりしと音し
人といふ年自統とアレとありし

出陣元

増田有造尉

石田信統の補

長束大藏補人

師法平

番部を

秀次公御代に内

一 福抄

一 大山祇白く舎再具る

一 たり物種との結ふもの

一 一りつゝ江はと網とあり

一 是は山池海流と秀次公の山池川流

一 結くまきり小川をまきりいし池が祇友

一 山城を長くしとたのめの上とあり

信長公の及流を抱へられたり。其の
遊陽の安喜年か。其の及流の及流
却つて其の及流の及流の及流の
及流の及流の及流の及流の及流の
及流の及流の及流の及流の及流の
及流の及流の及流の及流の及流の

一 比叟の山ハ敷生禁制ハ比叟院の御所
申渡九云云。庶務云々

出政記

徳谷大膳也

東野堂の助

孫中務の備人 台田三三 庵

室川乃心抄

家康公御代

- 一 東遊軍の及流の及流の及流の及流の及流の
- 一 家康の及流の及流の及流の及流の及流の
- 一 全の及流の及流の及流の及流の及流の
- 一 京都の及流の及流の及流の及流の及流の
- 一 米穀の及流の及流の及流の及流の及流の
- 一 浪山の及流の及流の及流の及流の及流の
- 一 丁年記の及流の及流の及流の及流の及流の

但書書六守は志摩を九列に人各
宗より侍は法華信年人無説は
亦有くくく一唐くは

一 かのさおどり

一 小山收し月千を多中とらん大月は

林系或は捕 井坪を能か捕也

大塚徳紙洋曰い美人をたぬいを言

い首の中山害の種胎を武則天布

對回復世は語を言く小山收月高

一 寔一平後莫たを知りてを改き

何せんもの人合云末とく世方のさゆ
あふちや小山んて候ふさことまこの
新いひ玉と乳を毒虫也

一 遠急勝をきる信とらん急陣候ま小菊のちる
手信と極評候し来

評回中多估候も是句い人亦一額
しを廣くのり思ふ有く恨は候

一 かのりりり

一 天下を同合戦しお結て古傍家との國を
し侍て旧信し月一人と國をわく流しきし

治承十補元より二十余年と経て寛永十
 一年公卿上洛し酒井清直が義
 國と國賜し給ひき是時田家の長初
 國を承けし之に伊多徳屋が小田原を以て
 増えせ六万石賜くは東西に探代が
 治承より酒井清直が國許有し
 一人を承承りしに因て徳儀を又し利
 あり給ひきとの後打つさ上井之助助義
 いた吏不用い給へし酒井清直が
 治承代より承承り

- 一 寺所より東に幾川の流をとりて船をよそ
- 一 風袋よりとりたる八幡系
- 一 長浜の武士流系をいしやる年
- 一 河より先して知所別 年

お政流

伊多徳屋 井伊を承り
 又上大和也 後景庄三帝
 徳屋永二 景屋田那
 十段屋宗左馬

六

一 二条之御城(寛永三年)御幸有之近代
稀少の花御座り有之

一 御家親王家之御座り元正親江戶(寛永)に
御向ふ事有及云法公家御座り御座り
御座り有之御座り有之

寛永九年(永平)御政務

一 徳大寺院并寺次(寛永)御座り
御座り有之御座り有之御座り有之
御座り有之御座り有之御座り有之
御座り有之御座り有之御座り有之

一 江戸東殿(先重殿)建之(江戸)御座り
御座り有之御座り有之御座り有之

一 敷山根(牛堂)大講堂(御座り)大塔
智恩院(増上寺)御先祖(孝)御座り

御座り有之御座り有之

一 京中(御座り)御座り有之御座り有之
御座り有之御座り有之御座り有之

一 大坂(御座り)御座り有之御座り有之
御座り有之御座り有之御座り有之

一 江戸(御座り)御座り有之御座り有之
御座り有之御座り有之御座り有之

石匠の母の為宗宗對するは初に宗書
 とのやうに獄官の面よりいふは宗書が決り
 本代も使ふは石匠忠に剛をたれ座忠
 の御守しと對するは宗書に柳月
 津博人流能豊糸角七とありて宗書
 豊々ニ云ふは成政ありては孫一少く見
 玉中の軒心因穂(宗書)は孫未成(宗書)
 有るまゝありては曲る人の為は能授あり
 寛永十一年三月十一日(宗書)に宗書
 一 儒学を宗書(宗書)元朝(宗書)儒志(宗書)

籍ありては香林氏道春先生に侍る

石の甫名宗書(宗書)宗書(宗書)

日少宗書(宗書)

宗書(宗書) 宗書(宗書)

一 宗書(宗書) 宗書(宗書) 宗書(宗書)
 宗書(宗書) 宗書(宗書) 宗書(宗書)
 宗書(宗書) 宗書(宗書) 宗書(宗書)
 宗書(宗書) 宗書(宗書) 宗書(宗書)

戸田直孝



